

日本精鉱、新難燃剤を開発

アンチモン削減し安価に

年度内めど

日本精鉱は、難燃樹脂のコスト抑制に貢献する難燃剤製品の上市を目指す。主力の樹脂難燃剤の三酸化アンチモンについて、アンチモン使用量を低減もしくは使用しない複合難燃剤の開発に取り組み、本年度中の販売開始予定。レアメタルのアンチモンは、主要国の中国による輸出規制の影響などで相場が高騰した。供給面・コスト面から需要の多い難燃剤向けを中心に、アンチモン代替難燃剤の要望が顧客から強いことから、これを安定的に提供する狙い。現中期経営戦略の最終年度に当たる2027年度までに年間100ト以上の販売を計画する。

相場高騰・需給逼迫に対応

主力製品の三酸化アンチモンは、ハロゲン系難燃剤の難燃効果を高める助剤として広く使用される。だが昨年

中国が輸出規制を強化。太陽電池カバーガラスの清澄剤用アンチモン需要の急増も重なり、アンチモン相場は規制前比で約2・5倍に高騰した。三酸化アンチモンも需給逼迫し、難燃剤製品のコス



北園部長

ト抑制と安定供給が急務となっている。

これに対し、同社はアンチモン事業の開発・生産拠点である中瀬製錬所(兵庫県養父市)で、アンチモン低減と非アンチモンの両面から複合難燃剤の開発を加速させる。従来と同じく、ハロゲン系難燃剤の性能を高める難燃助剤で、既存の三酸化アンチモンと同等の難燃性能を目指す。

三酸化アンチモンは金属アンチモンを原料とするが、複合難燃剤は複数の難燃効果のある材料を最適配合して三酸化アンチモンと同等の難燃効果を発揮させる。そのため混合機や評価機器などの新た

な導入を検討するほか、M&A(企業の合併・買収)を含め広く生産・供給体制を構築する方針。北園智・技術開発部長は「現中経での有望事業で積極投資の対象だ」と強調する。

保有する三酸化アンチモン製造技術は、そのまま活用できる。顧客が求める配合や粒度の複合難燃剤を製造して、難燃性が最大化する条件を見いだす。

開発を率いるのは今年度から事業化の推進役として発足した技術開発部だ。設備や品質保証など各開発部門が密接に連携し、開発の精度とスピードを高めたい。北園部長は「競争力ある製品をより早く市場に投入できる体制とした」と語る。

高付加価値製品の開発により顧客の課題を素早く解消し、企業価値の向上も実現させたいと考えた。